

2.3 カリキュラム概要

2.3.1 導入科目

導入科目は4つのメディア表現基礎から構成されます。まず、本学の教育研究方針と、今後のプロジェクトの遂行の前提となるコラボレーションへの動機付け、修士研究を始める際の基礎要件を養うために、メディア表現基礎1(導入・紹介)を開催します。そして、アカデミックな場から社会へ活動を還元するために必要とされる研究発表等の技術を実践的に習得するメディア表現基礎2(制作・展示)が続きます。

また、高度なメディア表現に必要な知識や技能を身に付け、思考を深めるための導入となるメディア表現基礎3(思索・講義)が開講され、研究・制作を進めるための基盤力と情報に関する共通知識を得るとともに、その成果をまとめるドキュメンテーション技術を習得するメディア表現基礎4(創造・記述)によって締めくくられます。

これらの科目を通じて、今後の専門科目、プロジェクト科目あるいは特別研究の履修にあたり必要となる基礎的な知識・技術の確認と習得をねらいます。

(1)メディア表現基礎1(導入・紹介)

ワークショップ形式の授業を通じ、作品制作や研究活動において必要とされるメディアや情報の扱いに対する理解や利用方法を習得し、共同作業やディスカッションを通じて議論の進め方や対話方法を深めることを目的としています。

(2)メディア表現基礎2(制作・展示)

論文作成や作品発表などに必要な、研究や表現活動等を社会へ還元する場合に要求される基礎技術を習得することを目的とした科目です。アカデミックなレベルで必要とされる論理的構成と、研究発表等のプレゼンテーションの技術を身に付け、効果的に伝える方法を学びます。

(3)メディア表現基礎3(思索・講義)

プロジェクト科目と特別研究科目で行う実践的かつ専門的研究・制作に対応し、高度なメディア表現に必要な知識や技能を身に付けるための特論科目の概要を紹介するとともに、特徴的な内容を実践に即した講義として開講し、その意義を対談や質疑応答によって明らかにします。

(4)メディア表現基礎4(創造・記述)

修士研究を進めるために必要とする情報工学分野の知識・技術を再確認し応用方法を探り、またそれらを言語化し、記述する技術を習得します。これにより、本学における共通知識・技術を位置付け、制作・研究の基盤とします。

2.3.2 総合科目

総合学は「事例・歴史・批評」といった視点から、現在の「情報」「科学」「芸術」における問題群を抽出し、検討を加える領域です。プロジェクトを履修する学生にとって、その制作ないし研究に直接に影響を与えるような情報や技術を提供することを目的としています。その意味で総合学は「プロジェクトからプロジェクトへ」といった思考=志向を有しています。各担当教員がそれぞれの専門の立場から「IAMASIにおいて何が必要であり何を思考し何を発信すべきか」という立脚点をもちつつ、講義・演習・ワークショップ・鑑賞など、あらゆる方法によって授業を展開します。具体的な構成・内容は以下のとおりです。

(1)総合学A(メディア技術史特論)

私たちは人類文明史における大きな転換点に立っています。メディアとテクノロジーの発達、そして容赦なく進行するグローバル化の中で、文化や芸術の意味をどのように考えるべきでしょうか？この授業では、そのための新しい美学と芸術理論の模索を行います。

(2)総合学B(表象文化特論)

「何か」が「別の何か」を表象しているような事象は無限にあり、扱う対象は多岐に渡ります。講義では限定的に、芸術・哲学・医療といった問題群を扱いますが、この学問が「世界を理解するための学問」であると同時に「世界を生きる実践」そのものであることも忘れてはなりません。同時に、言語という知性によっていかに世界を記述することが可能か／不可能かという技術をも学ぶことになります。

(3)総合学C(文化資源特論)

現代芸術における作品／資料のあり方を、作品概念と作品の流通形態の変遷から考えます。写真、映像、印刷、通信、コンピュータなどのメディアの変遷を背景に、オリジナル作品が現存せず、一過性の形式をもつ芸術表現が登場しました。研究や展示におけるアーカイブ資料の活用事例のほか、作家による二次創作やアーカイブに対する関心を通じて、メディア表現研究のコンテキスト=歴史観を構築する手がかりとし、メディア表現に関する論理的な思考を実践する基盤を持って欲しいと考えています。

2.3.3 専門科目

プロジェクト科目と特別研究科目で行う実践的かつ専門的研究・制作に対応し、高度なメディア表現に必要な知識や技能を身に付けるための特論科目です。制作方針や研究内容・目的に応じて必要となる科目を選択履修します。

専門科目は2×3のマトリックスを元に構成されています。

IAMASが扱う事象ないし方法として「表現・設計」の2項目をあげ、また研究対象となる領域ないしテーマとして「情報・メディア / 身体・環境 / 科学・社会」の3項目を選び、この2つの軸による6つの特論を設定しています。

また、論文研究では、論文を執筆するうえで必要最小限な技法を伝授しつつ、「論文を書く」ために「論文を読む」とはということかについて学びます。具体的には、各自が研究している領域あるいは近接領域の論文や著作を紹介してもらい、参加者でそれについて討究します。関連論文について「話す」ことは、同時に口頭発表のトレーニングともなります。

	情報・メディア	身体・環境	科学・社会
表現	メディア表現特論A	メディア表現特論B	メディア表現特論C
設計	メディア表現特論D	メディア表現特論E	メディア表現特論F

2.3.4 制作演習科目

プロジェクト科目を実施するために必要となる応用的・総合的な技能の修得を目的としています。具体的なテーマに沿って、必要となる先進的な技術等についての基礎知識の理解と実践的な基礎スキルの練習を行います。専門性に自足することのない複眼的な視野、及び実践的関心を基盤とする理論形成能力の育成を目標としながら、メディア表現における新たな問題の発見・解決方法の習得を目指します。研究能力とその基礎となる知の内実化を培います。

2.3.5 プロジェクト科目

表現活動の個人的・内面的な質は、その対極にある社会的・コミュニケーション的な空間と対決することで、はじめて深く鍛えられます。メディア環境がめまぐるしく変貌する今日、こうした開かれた表現活動の場は重要です。これらを実現するため学生はプロジェクト科目を履修することで、今の社会に接し表現活動における意味の抽出をはかり、社会へ向けた成果の発信や外部との連携を強く意識し、領域横断的に運営されます。1年から2年まで履修し、プロジェクトに参加します。

また、プロジェクトはその内容が個別の分野の基礎研究の比重よりも、応用研究によって得られた「新しい視点の提示」を重視しています。それらは領域横断的な視点からのみ提案できる体系研究、表現研究、調査研究、運用研究を示します。

2.3.6 特別研究科目

修士論文、修士作品の作成に対する研究活動や、課題解決に必要な方法等を得ることを目的としています。研究指導資格を有する教員の下で指導を受けて修了に向かって能力を向上させます。適時おこなわれる指導教員による個別指導の他に、ゼミ形式による意見交換や公開指導等を開催します。

また、セメスター毎に2週間程度の期間を特別面談期間として、指導教員の指導によって、専門分野以外の複数の教員に各自の研究について説明を行ったり、アドバイスを受たりすることで、研究の客観性を自ら理解する機会を設けています。

導入科目	総合科目	専門科目	制作演習科目	プロジェクト科目	特別研究科目
メディア表現基礎1 (導入・紹介)	総合学A	メディア表現特論A (表現×情報・メディア)	制作基礎	プロジェクト実習1A	特別研究 1A
メディア表現基礎2 (制作・展示)	総合学B	メディア表現特論B (表現×身体・環境)	メディアデザイン 演習	プロジェクト実習1B	特別研究 1B
メディア表現基礎3 (思索・講義)	総合学C	メディア表現特論C (表現×科学・社会)	インタラクティブ メディア演習	プロジェクト実習1Ai	特別研究 1Ai
メディア表現基礎4 (創造・記述)		メディア表現特論D (設計×情報・メディア)	情報工学演習	プロジェクト実習1Bi	特別研究 1Bi
		メディア表現特論E (設計×身体・環境)	デザインエンジニア リング演習	プロジェクト実習2A	特別研究 2A
		メディア表現特論F (設計×科学・社会)		プロジェクト実習2B	特別研究 2B
		論文研究			